
福 井 県 医 師 会

だまり

第562号 平成20年(2008)4月



表紙写真説明：線彩E

戦後のアメリカ抽象表現主義はコンセプト偏重でミニマルアートに行き着きました。私は、抽象絵画の先駆者であるカンジスキーやクレーがどちらかという人喜欢です。

福井市 平野 治和

私の研修医時代

福井県医師会監事 吉井正雄



2004年に新卒医師の新臨床研修制度が導入され、4年間が経過したが、この間都市と地方での医師の偏在、各診療科と研修医とのミスマッチからくる産婦人科、小児科をはじめとする多くの科での医師不足、また勤務医の過重労働など多くの問題が噴出し、医療界は崩壊の危機にあるとまで言われている。

私は昭和39年京都大学医学部進学課程に入学し、多くの短期間と、最後の長期間の医学部（大学も）ストライキのため、予定より半年遅れの昭和45年9月30日に卒業し、10月に医師国家試験を受験し合格し、11月に医師免許証を下附された。

ちょうどこの時期に、長い「インターン反対闘争」の苦難の末勝ち取った、「研修医制度」が導入された。それまでの「身分保障のない無給のインターン」から「身分の確立（非常勤国家公務員）」と「給与の支給」が保障された。

医学部6年生の後半より、教授会側の教育委員の先生方と学生側委員とで話し合い、卒業後の臨床研修について内容等を各科毎に検討しカリキュラムを作成した。内科系、外科系など大きな科では関連する他科も含め京大病院で2年間ローテイトすることとなった。

私は内科を志望していたが、同級生100人のうち内科志望者は30人いた。そのうち卒業すぐに県立立崎病院など市中の病院に赴任して研修をする希望者が6人いて、京大病院での研修希望者は24人であった。ところが当時内科は3講座（教室）しかなく、しかも1講座の受け入れ定員は6名であり合計18人しか残れなかった。そこで私達研修委員は放射線科と京大胸部疾患研究所附属病院内科の教授に事情をお話しお願いして3人ずつの研修医を受け入れてもらうことにした。内科志望者24人を第1から第4グループの6人毎に編成し3カ月毎に第1、第2、第3内科、放科・胸部研内科をローテイトすることになった。第4グループは3人は放科へ3人は胸部研内科で研修することとした。10月の医師国家試験には内科志望者全員が合格し11月から研修開始となった。ちなみに研修医手当は日給で950円位、月給として22000円程度支給されていたと覚えている。国試合格後京大病院内科希望の24人が集まり、まず最初にどのグループに入るかを全員で抽選することとした。その結果、正に運命の分かれ道か、今となって考えれば幸いであったのか、私は第4グループの放射線科になってしまった。（現敦賀医師会の二

ツ矢義一先生は第4グループの胸部研内科になった。）私は放科に入局したつもりではなく内科系の研修医としてたまたま放科を最初にローテイトし研修させてもらうとの気持ちであったが、放科の医局の先生方は（当時7～8名しか教室員はおられなかった）私達3人の内科系研修医を大変歓迎して下さって、特に当時助手の杉本千鶴子先生は大変喜んで何かとご指導を頂いたりお世話をして下さった。この時の2年先輩の医局員に現福井大学副学長（前放射線科教授）の伊藤春海先生がおられた。

放射線科では各種X線、RI診断と放射線治療などを研修し、病棟では主に放治のため入院されている癌患者（末期の方が多かった）の副主治医として治療に当たった。放射線外来の診療室で当時講師の阿部光幸先生（後に教授）から「吉井君、これからは「癌」の診療をしなければだめだよ」と言われたのをよく覚えている。そのお言葉のためかその後ずっと「早期胃癌」の診断を熱心に研鑽した。

私達の学年は長期の医学部ストライキによって「核医学」の講義が十分に受けられていなかった。そこで杉本千鶴子先生のお世話もあり、当時第二内科の助教授で放射性同位元素診療部（RI部）主任の鳥塚莞爾先生のRIグループの先生方から毎週火曜日の午後7時から2時間程RI診の医局で講義を受けた。この先生方の中に後に福井医大放射線科教授になられた石井靖先生がおられた。この核医学の講義を受けたことが後程また運命の分かれ道となった。

放科で3ヶ月余り研修した後、第1内科（脇坂行一教授）へローテイトし胸部研内科で研修した3人と合流した。内科では一人の研修医に対し先輩の先生や助手、講師が指導医として当られ、充実した研修が受けられた。第1内科では血液学・消化器病を、第2内科（深瀬政市教授）では内分泌学・免疫学・肝臓病などを、第3内科（高安正夫教授）では循環器系・腎臓病などを研修した。第3内科で研修中に前川孫二郎前教授の二男の前川冬夫先生に誘われて、大津の健康保険滋賀病院の人工腎室の夜間の透析患者さんの内シャントの穿刺導入と透析中の管理にアルバイトとして週1～2回行くことになった。この時交替で行った仲間に現京大病院院長の内山卓先生もいた。

1年間ローテイトして2年目のローテイト先として第4グループの6人は話し合ったところ、全員が初めの科に戻ることを希望し、

私も再び放射線科の研修に入った。2年目なので胃大腸のX線や内視鏡検査、血管造影やリンパ管造影の実技をかなり実行させてもらった。次にまた第1、第2、第3内科をローテイトし、いよいよ京大病院での2年間の研修を終えて市中の病院に赴任をしなければならなかった。既に結婚し子供もいたので、出来れば引越しをせずに済む京都市内か、近郊の病院が良いかなど迷っていた時、前川冬夫先生から健保滋賀病院に赴任して来ないかと誘われたので、すんなりと決心した。ちょうどその頃健保滋賀病院で夜間透析の(アルバイト)仕事をしている時に、当時の公立小浜病院院長の田辺賀啓先生が同院を訪ねて来られ「小浜病院も医師不足で大変なので吉井君、研修が済んだら是非小浜病院に来て下さい」と熱心におっしゃった。しかし私もまだ卒業して2年間を終えたばかりの技量、経験で地元の小浜病院に勤務して期待に沿えなかったら恥ずかしいのと、更に今小浜に帰るとずっと京大病院には戻れない気がして、後数年〜7、8年間は京都に居て赴任先の病院(健保滋賀病院と内心決定していた)から京大病院(当時は第1内科を志望していた)に戻って専門的な研修を曲がりなりにも研究し医学博士号を取得してから小浜に帰りたいとの旨をお話し田辺院長にはお断わりした。この件を同級生の内科研修医の福田善弘先生に話しをしたら「僕は小さい頃からずっと京都に住んでいるから一度地方に行きたいと思っている」と言っていて、私の代わりにと言っただけで大変失礼だが、公立小浜病院に昭和47年秋に赴任してくれた。この時小浜病院内科には大阪大学ご出身で肝臓病が専門の木村浩三先生(現小浜医師会会長)がいらっしやあって、福田先生も木村先生のご指導を受けられたためか、京大病院に戻った時には第2内科で肝臓グループに入って研究し、更に外科の肝移植チームとも協力したりして大活躍をされ、現在京大医学部保健学科教授になっておられる。

私は思い通りに昭和47年10月1日に健保滋賀病院(内科医員)に赴任し、内科全般と共に主に消化器系のX線・内視鏡診断を担当し、また人工腎室副主任として透析の管理、朝夕の内シャントの穿刺、抜去、回収などの業務を行った。

私の研修時代の話はこれまでであるが、研修の最初に抽選でたまたま放射線科に当たったために、その後の色々な「ご縁」に巡り合った事を加えてみたい。

健保滋賀病院内科勤務も2年近く経ち、そろそろ京大病院内科に戻って専門的に研修し、また博士論文のための研究もしたいと考え、第1内科の消化器病を担当されている助教授の三好秋馬先生のグループに入れてもらおうと半ば決めていたら、直前になって突然広島大学医学部の内科教授になって転出されてしまった。そこで戻り先(入局先)を迷っていたとき、昭和47年に放射線科の教授に

就任されていた鳥塚莞爾先生より昭和49年3月頃より週に2〜3回朝7時前に「吉井君、放射線科に戻って来ないか」との電話があった。当初、「私は放射線科に戻る気持ちはなく、内科で消化器系か循環器系をやりたいとおもっています」とお断わりしていたが、何回も電話があり、「研修医時代に放科をローテイトした遠藤君、福永君、安達君らが放科に戻って来ると言ってくれているよ。」「放射線科で診療は消化器系を下さい。内視鏡なども備えるから。研究はR1室でラジオイムノアッセイなどを下さい」など熱心に誘っていただいたので「そこまで言ってくれるなら」と昭和49年6月1日付で放射線科に入局した。この時期同級生6人が入局したが、後で聞いてみると鳥塚先生の夜の核医学の講義を受けた研修医は皆熱心な頻回の電話勧誘を受けたとのことであった。その後は放射線科(核医学講座も新設され)で臨床も研究も遊び(レクリエーション)も大変楽しく有意義に過ごし、助手、講師を勤め、また何とか医学博士号も授与されて後、鳥塚先生のお許しを得て京大医学部を辞し、地元の公立小浜病院に昭和57年9月1日より赴任勤務した。この時田辺賀啓院長に大変喜ばれたが、田辺院長はその半年後の昭和58年3月に辞職され、三重県の親元に戻られた。

また奇しくも、鳥塚莞爾先生は平成元年4月福井医大の学長に就任され、同じ県内医師会でお会いできることとなり、更に二女久美子が平成3年に福井医大を受験し合格した時には真っ先に合格の連絡とお祝いの電話を頂いた。学生時代にも色々とお世話を下さったり、目をかけて頂いていた。

現公立小浜病院院長(前核医学講座教授)の小西淳二先生にも京大放射線科勤務中の後半には免疫系に関する論文の読書会と一緒に参加させて頂いており、御子女が福井医大で二女久美子の2〜3年後輩であられて仲良くさせて頂いていた関係もあり、小西先生が公立小浜病院院長として赴任されて来られたことも何かのご縁と感じている。小西先生と私は医師会や地域医療の分野で、奥様と家内は音楽や絵画で、公私共にお世話になっている。

現在の新臨床研修制度のもとで新卒の先生方はどのような研修や生活がされているかよく分かっていないが、私達の昭和44年卒、45年卒の世代は「インターンや無給医局員」の時代からやっと研修医としての身分保障(非常勤国家公務員)(現在年金の算定の中にこの2年間の研修医機関も算定されていて少しは得をしている)とかなり安いのものの経済的保障がなされて安定した精神状態で研修に励めたのと、研修医のいわば一期生として、続いてくる後輩達に良いカリキュラムで研修できるように研修内容を点検反省して、改革などを行っていたと自負している。